

運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり

－ 教師の言葉がけに着目して －

学習開発コース (11220906) 近 野 巧

体育科指導では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることを重視している。そこで、本研究では、教師の言葉がけに着目して、「運動有能感」を高める授業づくりについて実践と検討を行った。その結果、「運動有能感」を高めるための教師の言葉がけとして、①学習の流れをつくる明確な指示②技のポイントを焦点化した言葉がけ③効果的なフィードバック④児童への積極的な言葉がけの4つの視点が有効であることが明らかになった。

〔キーワード〕 運動有能感、教師の言葉がけ、小学校体育科、マット運動

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

中央教育審議会答申(2008)では、体育科、保健体育科における課題として「運動する子どもとそうでない子どもの二極化」、「運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られること」等が挙げられている。そして、平成20年改訂小学校学習指導要領解説体育編では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことを重視している。

生涯にわたって運動に親しむためには、運動に対する内発的動機づけを高める必要がある。岡澤ら(1998)は、内発的動機づけと運動に対する自信を総合的に捉えた「運動有能感」との関係明らかにし、児童の「運動有能感」を高めることで、児童の運動に対する内発的動機づけを高めることができると述べている。「運動有能感」とは、運動技術に対する自信である「身体的有能さの認知」、努力すればできるようになるという自信である「統制感」、まわりから受け入れられているという自信である「受容感」の3因子からなるものである。

これらのことから、体育授業において児童の「運動有能感」を高める必要があると考えられる。教師は、児童がそれを高めることができるように積極的に関わっていく必要がある。また、多田(1986)は、運動学習における教師の言葉の使い方の重要性に触れている。教師のかかわりの中でも

教師の言葉がけは特に重要なものと言える。

(2) 研究の目的と方向性

本研究では、教師の言葉がけに着目して、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」からなる「運動有能感」を高める授業づくりの方法を検討する。本研究における教師の言葉がけとは、「児童の運動学習場面(練習やゲームの場面)における教師の言語行為及び学習課題の把握やまとめの場面での教師の言語的な働きかけ(発問や指示など)」とする。

(3) 研究の方法

本研究では、以下の3段階を設定しアプローチしていく。

まず、文献における先行研究の調査を通して、運動有能感を高める教師の言葉がけについて検討する。

次に、教師の言葉がけに着目した、運動有能感を高める授業実践を行う。

最後に、ベテラン教員A教諭の実践との比較・分析及び考察、成果と課題の検討を行う。

2 先行研究の検討

(1) よい体育授業の条件

高橋(2010)は、「現在の学習指導要領で設定されている体育科の目標や内容をひとまず受け入れ、これらが効果的に実現され、しかも授業を直接受けた子どもたちから高く評価された授業を『よい体育授業』である」と述べている。

そして、高橋(2010)は、よい体育授業を実現するための条件として、基礎的条件(周条件的条件)

と内容的条件(中心的条件)の2つを挙げている。

授業の基礎的条件とは、授業の目標や内容、方法についての考え方や形式にほとんど関係なく、すべての授業に要求される条件である。具体的には、以下の3つの条件が挙げられる。

- ①学習従事時間が確保されている
- ②学習の規律が確立している
- ③学習の雰囲気が明るく肯定的な関わりがある

授業の内容的条件は、基礎的条件のベースの上に機能する。具体的には、以下の4つの条件が挙げられる。

- ①学習目標がはっきりしている
- ②教材・教具の工夫がみられる
- ③学習方法のスタイルは多様である
- ④教師の指導性が明確である

高橋(2010)は、上記の④に関連して、教師行動を行動の質(言語的行動の質)に注目して分析した結果から、子どもが評価する体育授業での教師行動の特徴を7つ挙げている。(表1)

表1. 教師行動の特徴

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・説明場面での教師の言葉が鮮明で意味深く、子どもたちが傾聴する。・子どもたちの学習行動に対する観察が鋭く、まとめの場面での評価の言葉が素晴らしい。・肯定的・矯正적フィードバックに関わって有効な指導言葉が適用されている・教材解釈が深く、とくに運動技術や戦術の要点を明確に理解している。・技術的課題に対して、発問を投げかけ、子どもたちに思考させ、解答させるようなテクニックを用いている。・言語にくわえた非言語的行動がやさしく暖かい。・能力の低い子どもへの関わりや指導が多く、有能感をもたせる努力を払っている。 |
|--|

運動有能感を高める授業とは、よい体育授業の条件を満たした授業であると考えられる。

(2) 運動有能感を高めるマット運動の授業づくり

小畑・岡澤・石川・森本(2011)は、小学校6年生「マット運動」の授業において運動有能感を高める授業実践を行っている。その実践では、指導する技術を絞ったことやデジタルカメラによる視覚的フィードバックによって、児童が努力する内容を具体化でき、「チャレンジしたい」「努力した

い」という思いを高めたことが、「統制感」の高まりに影響を及ぼしたと考えられている。また、「統制感」を高める工夫によって、少しの上達でも認知することができ、「身体的有能さの認知」にも肯定的な影響を及ぼしたのではないかとある。

この実践の結果から、教師の言葉がけを用いて、児童の「統制感」を高めるためには、焦点化された指導と効果的なフィードバックが大切であることがわかる。また、「統制感」を高めていくことによって、児童の技能の向上を促進し「身体的有能さの認知」も高めることができると言える。

(3) 効果的なフィードバック

深見(2006)は、フィードバックの定義を「子どもの次の学習行動の改善・向上に向けて与えられる教師の言語的・非言語的行動」とし、体育授業における教師の効果的なフィードバック行動に関する研究を行っている。その研究では、教師の効果的なフィードバック行動に関して、次のような5つの具体的な示唆が得られている。それは、①子どもにとって自立的な運動学習時間を十分に確保し、その中で肯定的・矯正的フィードバック(承認・賞賛及び助言・課題提示)を積極的に与えること②表現のしかたを工夫してフィードバックを与えること③子どもに「役に立った」と受けとめられるフィードバックを与えること④次の学習行動に向けた具体的な課題提示を伴うフィードバックを与えること⑤課題解決につながり、適切で意味のあるフィードバックを与えることの5つである。そして、それらに求められる重要な条件として「豊かな関わりを生み出すための授業場面の設定」「子どもの学習成果に大きな期待を寄せる教師の愛情」「学習成果の実現につながる教師の専門性」の3つが挙げられている。

(4) 教師からの言葉がけと他者受容感

吉村・日角(2004)は、体育授業において、各場面、各個々の特性に応じ、うれしいと感じる言葉を、まずは教師が数多く発することが生徒の他者受容感(自分がまわりの人から受け入れられている、認められているという気持ち)の獲得につながり、それが内発的学習意欲の向上につながっていくと考えられると述べている。

これらのことから、体育科において、教師が積極的に言葉がけを行っていくことで、児童の「受容感」を高めることができると考えられる。

3 実践と結果（明らかになったこと）

(1) 授業の概要

山形県内B小学校第3学年において、器械運動（マット運動）の授業を行った。全9時間扱いの7時間目である。

(2) 授業を行うにあたって

児童の運動有能感を高める教師の言葉がけとして、以下の4つを意識した。

- ①児童の技の良い部分を伝える言葉がけ
- ②技のポイントを焦点化した言葉がけ
- ③成長の度合いを伝える言葉がけ
- ④児童への積極的な言葉がけ

(3) 授業の実践

【事例1】T1：筆者

T1：いいよ。OK。でももっと綺麗にできるな。
T1：OK。綺麗。
T1：OK。
T1：おし。綺麗だな。
T1：OK。もっと綺麗にできるかな。

児童が出席番号順に後転を行っている場面である。児童に対して「もっと綺麗にすると良い。」など抽象的な助言をしていることがわかる。

【事例2】T1：筆者

T1：そう。その時に、脇を締めるイメージでやってみて。1回それ意識してみて、それでできなかったら、また違うアドバイスをしよう。
(S1が筆者のアドバイスを受けて、もう1度後転に挑戦する。)
T1：そうそうそう。さっきより良い。

児童の技能を高めるために、事例2ではS1に対して言葉がけを行った。その結果、児童の技能の向上が見られた。しかし、T1は「さっきより良い」と抽象的な言葉でしか成長の度合いを伝えることができなかった。S1の技能をさらに向上させる効果的なフィードバックをすることができなかった。

授業全体の結果として、児童に対して積極的に言葉がけを行っていくことはできた。しかし、指示が児童に浸透しないなど、授業の流れを悪くする場面があった。

(4) A 教諭の実践

同じ単元の5時間目に行われた実践である。

【事例3】T2：A 教諭

T2：できる人達は、床（マット）を見てる。だから、バランスが取れる。
T2：床（マット）を見る。
T2：さっきの次の人から。
T2：床（マット）を見るんだぞ。
T2：すぐあっち（マットではない方向）向いた。
T2：ずっとここ（マット）見てるんだぞ。
T2：はい、すぐあっち（マットではない方向）向いたの分かる？
T2：そうそうそう。床（マット）を見てる。
T2：すぐあっち（マットではない方向）向いた。

A 教諭は、技のポイントを焦点化して、児童に浸透するまで何度も繰り返し言葉がけを行っていることがわかる。その結果、児童の技能の向上を促していた。また、児童に技のポイントが浸透しているため、児童同士で教え合う姿も見られた。

【事例4】T2：A 教諭

T2：スピードが大事。後回りはスピードが命。
(児童がアドバイスを意識して、後転をする。)
T2：体を丸めなきゃ駄目だぞ。体を丸めなければ、スピードがあっても回れない。

A 教諭は、児童に対して効果的なフィードバックを行っている場面が多く見られた。その結果、児童の技能の向上が見られた。

授業全体の結果としては、前述した「よい体育授業」の条件を多く満たした授業であった。筆者の授業と比較して、指示が明確であり、授業の流れが良いという違いも見られた。

4 考察

筆者の実践とA 教諭の実践とを比較すると、言葉がけの違いとして、以下の3つが挙げられる。

①指示の明確さ

筆者とA 教諭の授業では、指示の明確さに違いが見られた。A 教諭の指示は、体育館全体にしっかりと響きわたる声で、児童に簡潔に伝えることができていた。また、前提として、教師が授業全体の流れを明確にイメージすることができていたということも大きな要因である。

②技のポイントが焦点化された言葉がけ

A 教諭は本時の授業で1 番意識してほしいと考えているポイントを繰り返し児童に伝えていた。

また、練習の際のポイントを明確にし、かつ児童に浸透するまで強調していた。

③効果的なフィードバック

効果的なフィードバックの条件を満たしている場面がA教諭の方が多く見られた。

言葉がけを行っていく上で「技のポイントが焦点化された言葉がけ」「効果的なフィードバック」を意識することによって、児童の技能向上を促し、努力すればできるようになるという自信（「統制感」）を高めることができると言える。また、「統制感」を高めることによって、「身体的有能さの認知」も高めることができる。

A教諭の実践には、技のポイントを焦点化することによって、児童に技のポイントが浸透し、児童同士で教え合うという場面が見られた。このことから、「技のポイントが焦点化された言葉がけ」を行っていくことで「受容感」を高めることができると言える。また、積極的に児童に言葉がけを行っていくことも「受容感」を高めることにつながると考えられる。

児童に多くの言葉がけを行っていくためには、児童の学習従事時間を確保する必要がある。そのためには、指示を明確にし、準備や移動などの時間を少なくする必要がある。このことから、運動有能感を高める授業づくりにおいて「指示の明確さ」という視点も重要であると言える。

5 到達点と課題

(1)到達点

先行研究及び授業実践の分析から、運動有能感を高める教師の言葉がけとして、以下の4つの視点が重要であるということがわかった。

①学習の流れをつくる明確な指示

指示を明確にすることによって、児童の学習従事時間を確保する。

②技のポイントが焦点化された言葉がけ

技のポイントを焦点化することによって、児童の技能を向上させるとともに、児童同士の教え合いを促進する。

③効果的なフィードバック

次の学習行動の改善・向上に向けた言葉がけを効果的に行うことで、児童の技能を向上させる。

④児童への積極的な言葉がけ

前述の②及び③の視点を意識した上で、児童に数多くの言葉がけを行う。

(2)課題

①運動有能感の測定

今年度は、児童の運動有能感の変化を測定することができなかった。運動有能感を測定し、その結果に基づいた実践を行うことで、運動有能感を高める教師の言葉がけについて客観的に分析していく必要がある。

②教師の全体的なはたらきかけの分析

教師の言葉がけを分析する際に、教師がどのような表情・身振りで言葉を発したのか等、教師の言葉がけ以外のはたらきかけについても分析していく必要がある。

引用・参考文献

- 深見英一郎(2007):『体育授業における教師の効果的なフィードバック行動に関する検討』,筑波大学博士(体育科学)学位論文・平成19年7月25日授与(乙第2314号)
- 文部科学省(2008):『小学校学習指導要領解説 体育編(平成20年)』,東洋館出版
- 中村恭之(2009):「子どもに響くよい「言葉がけ」の視点」,『体育科教育』,第57巻,第14号,pp24-27
- 小畑治・岡澤祥訓・石川元美・森本寿子(2011):「運動有能感を高めるマット運動の授業づくり - 技術獲得に必要な技術認識を高める工夫を中核に - 」,『教育実践総合センター研究紀要』,(20),pp137-144
- 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996):「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」,『スポーツ教育学研究』,16(2),pp145-155
- 岡澤祥訓・三上憲孝(1998):「体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係」,『体育科教育』,第46巻,第10号,pp47-49
- 佐々敬政(2009):「言語化を活用した言葉がけ」,『体育科教育』,第57巻,第14号,pp44-47
- 多田俊文(1986):『授業におけるイメージと言語: 学力形成の理論を求めて』,明治図書出版
- 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖(2010):『新版 体育科教育学入門』,大修館書店
- 吉村功・日角知世(2005):「体育における教師や仲間からの言葉がけが他者受容感に及ぼす影響」,『北海道教育大学紀要(教育科学編)』,第56巻,第1号,pp183-192